

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	山尾 (木下) 博子
論文題目	現代インドネシア社会における中東留学者のネットワークと活動 ーアズハル大学出身者の社会的役割に関する研究ー		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、現代インドネシア社会における中東留学経験者がどのような社会関係を構築し、社会のなかでどのような役割を担っているのかを、エジプトのアズハル大学出身者に焦点をあてて明らかにするものである。本論文は、2部7章と序章・終章から構成されている。第1部はエジプト、第2部はインドネシアにあてられる。</p> <p>第1部は、20世紀初頭から現代までの時間軸をとって、エジプトにおけるインドネシア人留学生の活動を論じる。第1章は、インドネシアからアズハル大学への留学の歴史を通史的に記述する。続く第2章は、現代に的を絞り、留学生コミュニティの動態を明らかにする。学生組織と、そこで行われる学生活動を分析した結果、本学位論文申請者は留学生たちのネットワークを、地方組織のなかで相互に親密な関係性を構築するタイプと、地方組織の垣根を越えた比較的ゆるい紐帯をもつタイプの2つに類型化する。そのうえで、ハブ的な役割を担う学生を核に、この2つの類型が共存するものとして、現代の留学生ネットワークを細密に描き出している。</p> <p>第2部は、現代インドネシア社会に視点を移し、アズハル大学出身者の社会的役割を考察する。第3章は、現代インドネシアにおけるイスラーム実践の全体像のなかでの中東留学経験者の位置づけを考察する。西洋留学経験者がどちらかといえばイスラーム高等教育の発展を担っているのに対し、中東留学経験者はエリート層に偏らず、幅広い分野で社会的役割を果たす存在であると分析する。</p> <p>第4章から第6章までは、この中東留学経験者の幅広い社会的役割を、実例をもって解き明かしていく。第4章は、イスラーム高等教育の現場で活躍するアズハル大学留学経験者 (以下、アズハル大学出身者と記述する) に焦点をあてる。彼らと西洋留学経験者との両者によって、インドネシアのイスラーム高等教育は牽引されていることが示される。第5章は、現代インドネシア社会で一大市場となったイスラーム出版産業に着目し、ハブ的學生だった者が、翻訳書籍選定者・編集者・翻訳者のネットワークの中心になっていることが示される。第6章は、インターネット宗教問答に焦点を合わせる。アズハル大学出身者は、イスラーム系日刊紙『レブブリカ』オンライン版の宗教問答の歴代回答者を務めるなど、現代インドネシアのムスリムが日々の生活のなかで抱える多様なニーズに柔軟に対応していると分析する。</p> <p>第7章は、2010年5月創設の「アズハル大学卒業生世界機構」という同窓会組織を分析し、現代インドネシアにおけるアズハル大学出身者の役割の継続・拡大を企図する活動が行われていることを明らかにする。</p> <p>以上の議論をもとに、本論文は次の3つの結論を導く。第1に、現代インドネシア</p>			

社会において、アズハル大学出身者を代表とする中東留学経験者は、さまざまなイスラーム実践を中核的に担っている。第2に、その活動は留学時代のネットワークとインドネシア帰国後のネットワークという2つの要素から成るネットワークが元となっている。第3に、このネットワークが多様性と柔軟性を有していることが、一般大衆に近い立場から、宗教省官僚としてイスラームをめぐる宗教政策を立案する立場までの、幅広い役割をアズハル大学出身者が担うことを可能にしているのである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、現代インドネシア社会における中東留学経験者がどのような社会関係を構築し、社会のなかでどのような役割を担っているのかを、エジプトのアズハル大学出身者に焦点をあてて明らかにするものである。

本論文では、インドネシアのイスラームに関わる幅広い領域において活躍するアズハル大学出身者の姿が生き生きと描き出されている。その活躍は、上は宗教省官僚としてイスラームをめぐる宗教政策を立案する場面から、下は一般大衆のイスラーム実践に助言を与える側面までに及ぶものである。

本論文の学問的貢献は、以下の4点に集約することができる。

第1の学問的貢献は、東南アジア（インドネシア）と中東（エジプト）の両地域を同時に対象として調査・研究を行い、豊富なデータを収集している点である。フィールドワークは、エジプトのカイロ、インドネシアのジャカルタおよびジョグジャカルタにおいて実施しており、その充実した調査ぶりが論文から読みとれる。その際の聞き取りのための言語はもちろんインドネシア語であるが、インドネシア語のみならずアラビア語の文献読解にも努めている点は評価に値する。インドネシア・イスラームを研究対象とする研究者にとって、インドネシア語とアラビア語を共に用いて研究を進めることが望ましいことは言うまでもないが、両言語を同時に習得する困難さから、そのような研究は、これまでほとんど皆無であった。その意味で本論文は、今後の東南アジア地域研究、中東地域研究に、さらにいえばイスラーム研究にもインパクトを与えうる業績と評価できる。

第2の学問的貢献は、留学前・留学中・留学後を通して検討が行われている点である。5年間の一貫制博士課程年限内で仕上げた論文なので、同一人物について経過を追うことはもちろん不可能であるが、文献も援用することで、可能な限り時間軸をたどった展開に迫ろうとしている。インドネシアにおける留学前・留学後の活動については第2部、エジプトへの留学中の活動については第1部で述べられ、分析がなされたうえで、これらを総合する形で結論が導かれている点も高く評価できる。

第3の学問的貢献は、現代インドネシアにおけるイスラーム実践のさまざまな側面を広く取り上げて明らかにしている点である。第2部の第5-7章では、イスラーム教育、イスラーム出版産業、インターネットを用いたオンライン宗教問答、というさまざまな側面を取り上げて論じることで、立体的な像を浮かび上がらせることに成功しており、このことが、上述したイスラームに関わる様々な業種における幅広い分野におけるアズハル大学出身者の活躍という主張を説得的なものとしている。

第4の学問的貢献は、留学生・留学経験者間のネットワークが緻密に記述、分析されている点である。かれらのネットワークを、地方組織のなかで相互に親密な関係性を構築するタイプ（「高密度ネットワーク」）と、地方組織の垣根を越えた比較的ゆるい紐帯をもつタイプ（「越境的ネットワーク」）の2つの類型によって説明し、留学後

のアズハル大学出身者の活動をアズハル大学留学時代のネットワークとインドネシア帰国後のネットワークという2つの要素から成るものと説明するのはその好例である。

以上のように、本論文は東南アジア地域研究と中東地域研究を架橋する新しい挑戦であり、地域研究に新生面を切り拓く研究と評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成24年1月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。